

## パイオニア街の文化景観の変容とリトルインディアの形成--ロサンゼルスのエスノバープ, アルテジア・セリトスの事例

著者	斎藤 功
雑誌名	地理空間
巻	3
号	1
ページ	24-42
発行年	2010
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00151377">http://hdl.handle.net/2241/00151377</a>

# パイオニア街の文化景観の変容とリトルインディアの形成

—ロサンゼルスのエスノバーク、アルテジア・セリトスの事例—

斎藤 功

長野大学 環境ツーリズム学部

アルテジアとセリトスはカリフォルニア州ロサンゼルス郡の南東端にある。近郊農業地域として始まったが、酪農家が1930年頃から本地域に集まり、酪農保護区に変わった。1950年代末に市政を布いた結果、酪農家はより外側に追われ、酪農保護区は細分され、住宅地等に変った。1960・70年代にフィリピン系、韓国系、中国系などの多くの人びとが本地域に集中し、エスノバークとなった。

1923年のサンボーンマップによると、パイオニア街に面し立地した学校、病院、教会、郵便局、役場、商店が周囲の近郊農業地域から人を集めていた。1962年の電話帳と空中写真によると、パイオニア街の支配的な文化景観は病院と公共施設であった。1980年前後から多くのショッピングプラザが交差点や病院跡地に建設された。各ショッピングプラザはエスノバークを反映し、民族系の商店とその組み合わせを特色とする。最も大きな文化景観の変化は商業中心地区が1995年頃からリトルインディアに変ったことである。最初のインド人の店は1979年に立地し、サリー店、レストラン、宝石店、食料品店が集積するようになった。

キーワード：近郊農村、酪農保護区、エスノバーク（多民族居住郊外都市）、パイオニア街、リトルインディア

## I はじめに

アメリカは多民族国家である。なかでもカリフォルニア州ロサンゼルス大都市圏には出身の母国が異なる多くの人々が居住し、地域的な住み分けが行われていることで知られている(Allen and Turner 1988; 1997; 2002)。多民族化するなかでのリトルトウキョウの変容も明らかにされている(町村, 1999)。

本稿ではインド人街が形成されつつある、ロサンゼルス市の南東に位置するアルテジア市のパイオニア街を取り上げる。ロサンゼルス郡に含まれるアルテジア市は、ロサンゼルス市の近郊農村として発展し、第二次世界大戦前後を通じて次第に酪農家が集中し、酪農平原(Dairy Valley)と呼ばれるようになった。酪農保護区だったこともあってオランダ系、ポルトガル系の酪農家が多く集中したが、市制施行(1959年)とともに、酪農家は

他地域への移転や廃業を迫られた(斎藤, 2006)。酪農家の跡地は細分化され、一般住宅、工場、流通施設が建設された。つまり、都市化・住宅地化が進展したのである。なかでも都心へ比較的近く、比較的割安だった住宅地にはヒスパニックに加え、フィリピン系、韓国系、中国系、インド系など多くの人びとが居住するようになった。リ(Li, 1997)は、多数の民族が居住するロサンゼルス郊外地区をエスノバーク(Ethnoburb=多民族居住郊外都市)と名付けたが、アルテジアはローランドハイツ等と同様、アジア系の人びとが多く居住するエスノバークといえよう。

アルテジアのパイオニア街はこの酪農平原の中心都市であったので、周辺の宅地化が進むなかで中心性を保ち続けた。しかし、1980年代から中心地機能のある公共施設の近距離郊外移転、病院の廃止などもあって中心性を失いつつあった。この1980年代に、多くのショッピングプラザの建設と

ともにインド人商店が進出し、パイオニア街に最も新しい文化景観をそえた。リトルインディアと呼ばれるインド人街の形成を考察する前に、パイオニア街の商店街の変遷を考察することにした。というのは市街地の目抜き通りである商店街には、その地域の経済・産業等の状態が反映されると考えられるからである。現在の様相については現地調査で確認できるが、それ以前の様相については、古い地図や空中写真の存在が不可欠である。

筆者はまず、古い地形図(Los Alamitos 1/24,000 1964)から、街区の概要を知った。また、空中写真をみることによりパイオニア街の様子と、その外側に広がる多くの酪農家の存在が確認できた。さらにそれを古い電話帳の街区リストと照合することによって、1962年のパイオニア街の街区構成を復元することができた。戦前の様相を知る資料としては、保険会社の地図である1923年のサンボーンマップ<sup>1)</sup>が存在した。これには、主要建物の建材や学校・商店などの機能が書き込まれているので、当時の市街地の業種構成を復元できた。それを、「アメリカのイメージ」という写真シリーズの一冊である『Artesia 1875～1975』(Bloomfield and Bloomfield, 2000)の中の写真と突き合わせることによって1923年の実態の解明を試みた。

これらの作業は、アルテジアを中心としたこの地域が、ヨーロッパ系の近郊農業集落から、オランダ系・ポルトガル系中心の酪農保護区を経て、アジア系を中心としたエスノバーク＝多民族居住郊外都市へ変化していく様相を解明することになる。

## II 近郊農村とアルデジア

### 1. アルテジアの近郊農業

アルテジアはその名を被圧地下水の自噴井戸(Artesian Well)に起因するという(Bloomfield

and Bloomfield, 2000)。1869年、アルテジア土地会社(The Artesia Land Company)が、アルテジアの町を創設した。そして1876年に土地の分譲を開始し、50農場が入植したという(Splansky, 1996)。

1885年にはブドウ栽培がこの地域の農業発展に重要になり、アルテジアのブドウ園からの原料はダウニーやアナハイムのワイナリーに出荷された。その後、アルテジアにはアルテジアワイナリーとトンプソンエランプトンワイナリー社が設立された。初期の入植者であるエランプトン一族は井戸掘削、銀行、小売業等に事業を拡大し、ブドウ園、ワイナリー、酪農にかかわった有力者であった。1897年にロスアラミトスに製糖工場(Santa Ana Sugar Factory)ができると、ビート栽培が盛んになった。それが閉鎖されると、1900年代に養鶏、園芸、酪農を含めた混合農業が一般的となった。なお、地下水が豊富だったので、カリフラワー、トウモロコシ、バレイショ、キャベツ、ピーマン、トマト、イチゴなどの野菜が栽培された。本地域は、まさにロサンゼルス近郊農業の様相を示していた(Bloomfield and Bloomfield, 2000)。

### 2. アルテジアの中心地・パイオニア街の土地利用(1923年)

サンボーンマップは、サンボーンマップ社(Sanborn Map Company)によって作製された地図で、契約建物に保険料を課すため、建物の構造と機能等が書き込まれたものである。図1は、ロサンゼルス郡のアルデジアのメインストリート(現パイオニア街)を示した1923年9月の図である。そこには、南は1番通り(現サウス通り)から北はオレンジ通り(現183番通り)までの市街地構成が示されている。また、1900年に開通したロサンゼルスとサンタナを結ぶパシフィック電鉄

(Pacific Electric Railway) が斜めに走っている。そのアルテジア駅の北を東西に走る3番通り(187番通り)とオレンジ通りの間のパイオニア街がアルテジアの中心市街地であった。

パイオニア街とオレンジ通りの角は、アルテジア中等学校(Artesia Grammar School)とアルテジアメソジスト教会(First Methodist Church)からなっていた。この学校は、アルテジア土地会社から提供された5エーカーの土地に1875年設立されたものである。1910年にレンガ作りに建て直され、パイオニア学校として親しまれた。一方、アルテジアメソジスト教会は1876年に設立されたもので、敷地は1880年に購入された。最初の建物は一部屋造りで、日曜学校には様々な子供達が集まったという(Bloomfield and Bloomfield, 2000)。1923年には改築され、大型化とともに機能が多様化した。学校の南には、学校と同じ敷地を有するアルテジア病院があり、その斜め向かいにキリスト教会(Artesia Christian Church)

があった。その南に民家3軒おいて婦人会館(Womans Club)があった。この教会は1914年に移って来たものであるが、1952年に電話会社(General Telephone社)に販売された。また、裏通りにはクリスチャン科学会(Christian Science Society)があった。

1933年3月のロングビーチ地震の際、パイオニア学校が被害を受けたので、メソジスト教会に6クラスが移り、授業に使われた。また、1952年1月の大洪水の際には、パイオニア学校(1949年で閉鎖された)、メソジスト教会、キリスト教会、婦人会館に赤十字の救護センターが置かれた。つまり、クリスチャン科学会を含め、これらは公共施設としての役割を演じていたのである。

4番通り(現186番通り)から3番通りの間には、雑貨店3、レストラン2、洋服屋2があった。そしてパン屋、肉屋、薬屋、床屋、石屋が存在した。この繁華街には郵便局も存在した。なお、ドラッグストアでは、薬品に加え、菓子、タバコ、フィルム、スポーツ用具、宝石、玩具、雑誌が置いてあったという(Bloomfield and Bloomfield, 2000)。比較的敷地が広いのが、自動車販売・修理工場で、3軒存在した。周知のように1920年代は、フォードT型車が普及した時代である。しかも、当時の写真には馬車も存在していたので、馬具屋(Harness Shop)もパン屋の隣に存在していた。このことは1923年が馬車から自動車への移行期であることを示している。3番通りとパイオニア街の南東角には1904年建設の雑貨店があり、その二階がアルデジアホテルになっていた。パイオニア街を挟んで向かい合っているのは、1905年に建設されたアルテジア最初のレンガ造りの商店で、二階は集会ホールになっていた。アルテジアの草分けエランプトン氏が建てたこの建物の奥は倉庫になり、南角には銀行(First National Bank)が入っていた。この銀行は1924年に187番通りを

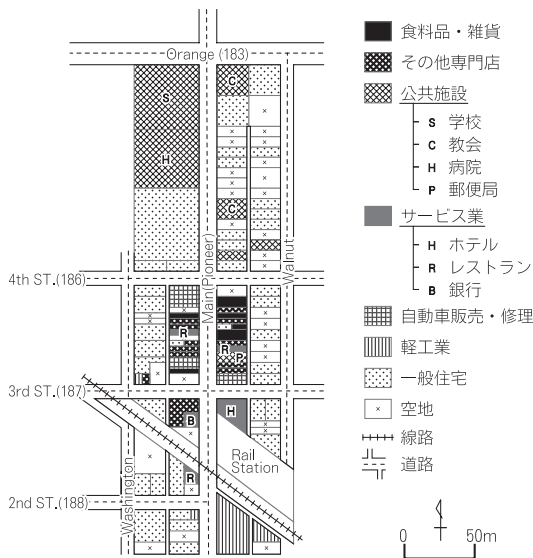


図1 1923年のパイオニア街の商業機能と住宅施設(Bloomfield and Bloomfield (2000) および現地調査により作成)

挟んだ北に新築された建物に移った。しかし、大恐慌の影響で1932年に閉鎖に追い込まれた。以上のことからパシフィック電鉄と183番通りまでが、アルテジアの中心街といえよう。

鉄道の南側には材木会社 (Griffin Lumber Co.) が存在した。製材所、材木置き場、小屋があり、奥にセメント会社があった。エランプトン氏のレンガ建物の南にはレストランとガソリンスタンドがあり、それ以外は一般住宅であった。このサンボーンマップにはオレンジ街の北は住宅地や農地となっており、前述のように近郊農業が行われていたと思われる。一部には養鶏場の記載もある。

### Ⅲ ロサンゼルス近郊酪農村とその変貌

#### 1. 酪農家の流入と酪農保護区

前述の土地利用図を作成した1923年は、初期のイギリス系入植者の酪農場に、サンホワキンバレーで酪農を行っていたポルトガル系移民が雇われた年でもある。1930年頃からオランダ系酪農家はアルテジア地区に流入し、ロサンゼルス郡の有力な酪農地帯になった。すなわち、ノーウォーク (Norwalk)、アルテジアなどからなるロサンゼルス郡の南東部がロサンゼルス集乳圏の半分近くを占めていた (Fletcher and McCorkle, 1962)。なかでもアルテジアを取り巻く地域は、農業を存続できる広い区画と農村地域としての課税など、酪農家を優遇する酪農保護区となり、行政的地名もデアリーバレー (Dairy Valley)、デアリーシティ (Dairy City)、デアリーランド (Dairyland) からなっていた。この酪農保護区の酪農家の半数はオランダ系で、45%はポルトガル系酪農家であった。

第二次世界大戦後にロサンゼルス市中心部と南部のロングビーチから都市化の波が押し寄せ、酪農家は都心に近いダウニー、パラマウントなどからより郊外のノーウォーク、アルテジア、デア

リーバレーおよび隣接するオレンジ郡のデアリーランドなどに外方移動した。例えば、「アルテジアの高名な酪農家ジョーゴンザルベス氏は183番通りの18エーカーの土地に新しい80頭畜舎を建て、11月12日に移った。また、アルテジアのジャックベレイラ氏は60頭畜舎を建てた。ジョンゴディナ氏は畜舎を拡張しようとし、穀物置き場を建てた」 (California Dairyman, 1952年11月号) というように、1950年代には新しい酪農施設が続々と建設中であった。このように多くの酪農家が転入してきたので、アルテジア・デアリーバレー地域には1957年当時400の酪農場と10万頭の乳牛がいた。なお、80頭畜舎という表現は、この4倍の320頭の搾乳規模を意味する。これは「平均300-350頭を搾乳する酪農家の15エーカーの土地は、灌漑草地、コラル、住宅・搾乳施設が3分の1ずつ占める」 (Fielding, 1962) という表現と符号するものである。Splansky (1996) によれば、1959年にはデアリーバレーには241、デアリーシティには40~50、デアリーランド市に40~50カ所の酪農場が存在したという。この状況は街区毎に居住者名と職業が載っている1960年、1962年の電話帳でも確認された。筆者はかつて地形図と空中写真を用いてこのアルテジア・デアリーバレー地区の1953年の酪農家の分布の復元を試みた (斎藤, 2006) が、その際800m四方の土地 (1/4セクション==64ha)に、10戸前後の酪農家が立地していた。それは1962年の状況と大きく変わってなかった。

しかし、1956年頃から酪農保護区でも市政施行が実施されることになった。1956年にデアリーバレーは市制施行してセリトス市に、アルテジアも1959年に市制施行した。市制の施行とともに5エーカー以下の土地に細分化することが可能となり、次第に酪農場の施設は取り払われ、住宅地や工場・流通施設に変わっていったのである。

## 2. 1962年のパイオニア街の土地利用

1960年と1962年の電話帳には、街路別に居住者と職業が記載されている。それと空中写真を照合し、1962年のパイオニア街の市街地構成を復元したのが、図2である。1962年を採用したのは、アルテジア医療センター＝パイオニア病院が完成し、キリスト教会跡に電話会社の建物が完成していたこと、および1965年の空中写真との整合性が高いからである。

### 1) 酪農施設とその残象

1962年のパイオニア街には、デアリーバレーの酪農を反映して酪農関連施設が比較的多く存在した。パイオニア街とアルテジア通りの角には、乳質検査等を行うアルテジア酪農検査所があった。また、パイオニア街と187番通りの角には酪農家に飼料・干草・穀物を供給するアルテジア飼料・穀物会社が存在した。この会社は1945年から1966年まで営業を続けた。また、サウス通りとの交差点の北西角にはスタンコ酪農機械器具販売会社があった。183番通りの北の西側中程にも酪農器具販売のロレンス社が、東側にはクリステンセン飼料販売会社も存在した。また、パイオニア街と176番通りの角には乳牛の取引を斡旋するスティーブル畜産会社が存在した。つまり、パイオニア街には多くの酪農関連施設が存在したのである。

1962年の電話帳によれば、アルテジア通りにはシューペリア乳業協同組合社 (Superior Milk Producers Association) が存在した。その施設は、名称を California Milk Producers を経て、CDI (California Dairies, Inc.) として現存している。また、パイオニア街を南に行くと、195番通りとの交差点にジャジーゴールドデアリーの直売店があった。その名残は、現在でも現金販売の清涼飲料店として認められる (図3)。これらに加え、アルテジアの市域には多くの酪農場に加え、専門化した子牛の肥育場、飼料会社、家畜病院等も存在

した。したがって、この時期は、農業 (酪農) 地帯から住宅地への移行期であるといえる。

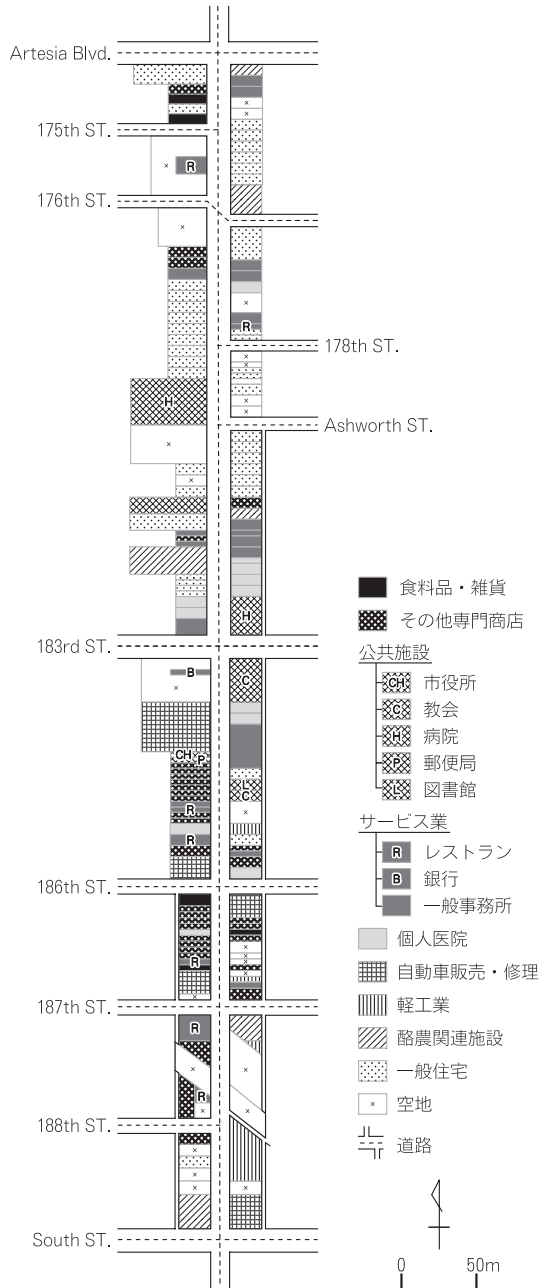


図2 1962年のパイオニア街の業種構成  
(「Los Alamitos 1/24,000および電話帳より作成)



図3 酪農地域の残象

(2009年2月)

パイオニア街とエバーレ通りの交差点には Jersey Gold Dairy の直売店 (Cash and Carry) の名残がある。現在は牛乳に加え清涼飲料等を販売。

## 2) 中心市街地

まず、アルテジア通りから183番通りまでの商店の立地をみよう。アッシュワース通りとパイオニア街の突き当たりに、外科医のミュールキン博士を中心に設立されたアルテジア医療センター＝パイオニア病院が1962年に完成した。そして183番通りとパイオニア街の北東角にはアルテジアコミュニティ病院があった。この病院は、パイオニア学校の南にあったアルテジア病院が移転して名称を変えたものである。

このコミュニティー病院の北には外科医2や歯科医2、パイオニア街を挟んだ向かいにも外科医と歯科医がいた。さらに183番通りを挟んだメソジスト教会の南にも外科医・歯科医・眼科医等が住んでいた。新しいパイオニア病院の北東にも外科医がいたので、この2つの病院を中心に医療関係者の集積が始まっていたということができよう。

これら病院・医療関係を除くと、テレビ販売店2、電機冷蔵庫、食糧品店、酒屋、花屋、レストランがあった。北部にはアルテジア葬儀社やライオンズクラブも存在した。さらに、不動産2、保険

会社2、弁護士2、美容・床屋があった。つまり、法曹関係事務所の存在に特色があったのである。電話帳には全ての家庭の職業が記載されているわけではないので、それらは一般住宅としたが、病院、法曹関係など、パイオニア街が中心性を高めていたことが想像される。

しかし、パイオニア街の中心は183番通りからサウス通りまでの半マイル、正確にいうならば、旧アルテジア駅の北187番通りまでといえよう。旧アルテジア駅というのは、1905年に営業を始めたパシフィック電鉄が1961年限りで操業をやめ、鉄道時代に終わりを告げたからである。これは自動車輸送時代の幕開けでもあった。183番通りの南、パイオニア学校の場所はファーストセキュリティー銀行となり、南半分をフォード自動車占めた。東南角のメソジスト教会は、アルテジアの象徴として存在していた。パイオニアフォード社に加え、186番通りの交差点にはアルテジアタクシーと自動車修理工場があった。その向かいは西部自動車販売があり、187番通りとの交差点の元銀行の北側には中古車販売店があった。そしてサ

ウス通りとの東角にはアルテジア自動車修理工場が存在した。つまり、5つの自動車関連事業所が存在したのである。

パイオニアフォードの南にはアルテジア郵便局と市役所があった。その向かいのキリスト教会跡にはジェネラル電話会社が操業していた。その南には公立図書館のアルテジア分室が置かれていた。公共施設としては、ほかにアルテジア商工会議所が187番通りの北にあった。市役所の南には、花屋、美容院2、床屋2、ダンススクール、宝石店2、会計士、レストラン3、洋服屋2、クリーニング3、眼鏡店、家具店3、電機製品、衣類、靴屋2、薬局2、パン屋、玩具、食料品2があった。これらのうち、コーヒースタンドから始めたハンクコーヒースョップは、1955年から1985年まで町民のたまり(社交)場であった。他のコーヒースョップと同様、朝の2エッグソーセージベーコン(トースト・ハッシュブラウン込み)から始まり、サンドイッチのランチメニュー、ハンバーガーやディナーステーキを提供した。また、ポストマ家具店とディルケンズ家電店は、1962年にフォーレイ氏から購入したものである。ポストマ家具店はオランダ系で、家電店も買収し、インドのマハラジャが使うようなベットなどを置いて事業を今でも継続している<sup>2)</sup>。一方、ディルケンズ社は線路の北側に移って冷蔵庫等の販売で継続している。さらに、レイクマン氏が1952年に購入したパン工房アルテジアベーカリーは50種類にわたるオランダ系のパンやケーキを焼き続けた、アルテジアの名物店であった。私が最初に訪問した時は50周年記念の垂れ幕があったが、その後は休止中であった(図4)。現在はインド系の食料・雑貨店に変わっている(図5)。

187番通りの南の西側には、レストラン2、家具店2、クリーニング、酒屋があり、東には前述の飼料会社に加え、屋根材屋・材木会社、自動車修理

会社が存在した。

#### IV エスノバーブと商店街プラザ

##### 1. エスノバーブの形成

アルテジアは1959年に市制を施行した。当時の人口は9,500人であったが、1960年のセンサスでは9,993人、1970年には14,757人となった。一方、1956年に市制施行したセリトスはアルテジアを取り巻く酪農地帯であったので、1960年の人口は3,508人であった。1970年にはアルテジアとほぼ同じ15,850人となった。しかし、1980年にはアルテジアが14,301人であったのに対し、セリトスは53,020人となった。つまり、アルテジアは1960年代に、セリトスは1970年代に急激に都市化したことがわかる。

表1はアルテジア市とセリトス市の民族構成の変化を示したものである。ヨーロッパ系白人の数は1970年に両市とも95%を占めていたが、2000年には前者が44.2%、後者が26.9%と急落した。両年のアルテジアの白人人口の実数は14,344から7,236へと半減したのに対し、セリトスのそれは15,165から13,851と大きく変わっていない。このことは、アルテジアでは白人がそれ以外の民族に交替したことがわかる。セリトスでは他民族の増加があったことがわかる。2000年における白人の出身地をみると、アルテジアではポルトガル系1,539人(9.4%)、オランダ系747人(4.6%)、ドイツ系496人(3.0%)、イギリス系406人(2.5%)の順であった。このことは、人口構成においても酪農時代の名残が見て取れることを意味しよう。ただし、イギリス系にスコットランド系100人、ウェールズ系63人を加えると連合王国の合計は569人で第2位になる。一方、セリトスではオランダ系610人(1.2%)、ポルトガル系399人(0.8%)で、ドイツ系2,440人(4.7%)、イギリス系1,780人に及ばない。オランダ系、ポルトガル系の割合





図4 2004年のパイオニア街

(2004年7月25日)

1952年創業のオランダ系のパン屋 Artesia Bakery には50周年の幕が掲げられている。1962年開店したオランダ系のポストマ家具店は、当時から継続する唯一の商店で、現在インドのマハラジャが寝るようなベッド等を置いている。



図5 パイオニア街の変化

(2009年2月)

アルテジアベーカリーの跡地に立地した食料品店 Ker Little India. 左端の Udupi Palace はベジタリアンレストラン。

表1 アルテジア市とセリトス市の人口と民族構成

地域 年度	アルテジア				セリトス			
	1970	1980	1990	2000	1970	1980	1990	2000
人口	14,757	14,301	15,464	16,380	15,856	53,020	53,240	51,418
人口割合	100.0	100.0	100.0	100.0%	100.0	100.0	100.0	100.0%
白人	97.2	80.3	55.9	44.2	95.6	63.6	42.3	26.9
黒人	0.0	0.1	2.7	3.6	0.3	0.4	7.4	6.7
その他	1.0	13.3	24.6	38.3	0.6	6.0	4.7	10.4
アジア系		4.3	15.8	27.4		22.1	44.8	59.8
韓国系		0.4	1.6	4.5		4.1	12.2	17.5
中国系	0.3	0.6	3.7	5.5	0.7	3.3	10.2	16.3
フィリピン系	0.1	2.2	6.7	10.5	0.6	8.1	11.0	12.1
インド系	0.9	0.9	1.8	4.7	0.1	1.8	3.9	5.7
日系	0.4	0.6	0.6	0.6	2.0	3.9	4.0	3.6
ベトナム系		0.1	0.2	0.8		0.5	1.3	2.0

(Population Census および Los Angeles Almanac 2000 による)

がアルテジアで高いのは、中心性の高かったアルテジアに改革教会やポルトガル協会が存在したからであろう。

1980年における民族構成は、アルテジアでは白人、その他（ヒスパニック）の順で、アジア系は4.3%であった。アジア系人口は1990年15.8%、2000年27.4%と増加した。一方、セリトスでは1970年において日系人が314人（2.0%）で、最大のマイノリティであった。しかし、1980年になると日系人は3.9%を占めたものの、フィリピン系8.1%、韓国系4.1%に凌駕された。1990年になるとフィリピン系が11.0%を占めているものの、韓国系12.2%に凌駕された。2000年には韓国系と中国系が17.5%と16.3%を占め、両者がマイノリティのなかのマジョリティになった。これらのことは、新興住宅地であるアルテジア、とりわけ、セリトスでは韓国系、中国系の人びとが急増したことを意味しよう。なお、セリトスの中国系8,396人のうち、先に渡米していた台湾人が2,221人を占めていた。

ロサンゼルス郡のサンガブリエルバレーで中国系移民を検討したり（Li, 1998）は、中国系移民は1970年代から増大し、1980～1985年、1985～1990年と年代が新しくなるにつれて急増していること、とくに1980年以後の移民が半数以上を占めていることを明らかにした。このようにロサンゼルス郊外で中国系をはじめ少数民族が増大した地区をLi（1997）は、エスノバープ（Ethnoburb: 多民族居住郊外都市）と名づけたが、それはまさにアルテジア・セリトス地区にも妥当するといえよう。

ここでインド系についてみると、アルテジアでは1970年の0.9%から2000年の4.7%に漸増してきたが、セリトスでは両年度0.1%から5.7%と増加した。このことはパイオニア街のリトルインディアにインド人商店が集中しているとはいえ、より広域的に考察する必要性を意味しよう。

リトルインディアと比べれば、中国系や韓国系にとってパイオニア街の商店街は最寄品の商店街であるのに対し、リトルインディアは買い回り品の商店街であるといえよう。

## 2. ショッピングプラザの形成と市街地の機能変化

1980年前後からパイオニア街では、商業地の一角を囲ってそこに共用の駐車場を設置するショッピングセンター型の商店街が増えた。しかし、このパイオニア街では、一般のショッピングセンターより規模が小さいので、ショッピングプラザと呼ぶことにする。図6は、2008年のパイオニア街の商店の様相を示したものである。ショッピングプラザ内の個別の商店を示すことができなかったため、ショッピングプラザの位置は①～⑩として図6の中に示してある。

ショッピングプラザは銀行やスーパーマーケットなどの主要な施設と棟割り長屋のようなテナントショップからなる。ショッピングプラザの規模は異なるが、前述の民族的多様性を反映して韓国系、中国系、インド系などからなる。表2はこれらプラザ商店街の主要施設と商店の特徴を示したものである。たとえば①のアルテジアプラザには韓国系のハンミ（Hammi）銀行と韓国系の焼肉店ソウルと焼肉レストラン、山東飯店（朝鮮系）、携帯電話の電気店、ビデオ店、化粧品店と美容院などがあり、ハングル文字の表示もある。そしてこの一角に繰り込まれた、食料品店、コピー会社、印刷、土産物等も韓国系経営者であった。

パイオニア病院の跡地を中心にしてきた④アルテジアオアシスプラザは、そのなかでも最大のショッピングプラザである。ここにはスーパーのランチマーケット99（大華超級市場）を中心に様々な業種がある。華美銀行、聯合銀行、宝石、眼鏡などの貴金属店<sup>3)</sup>、天天漁港、コーヒー・紅

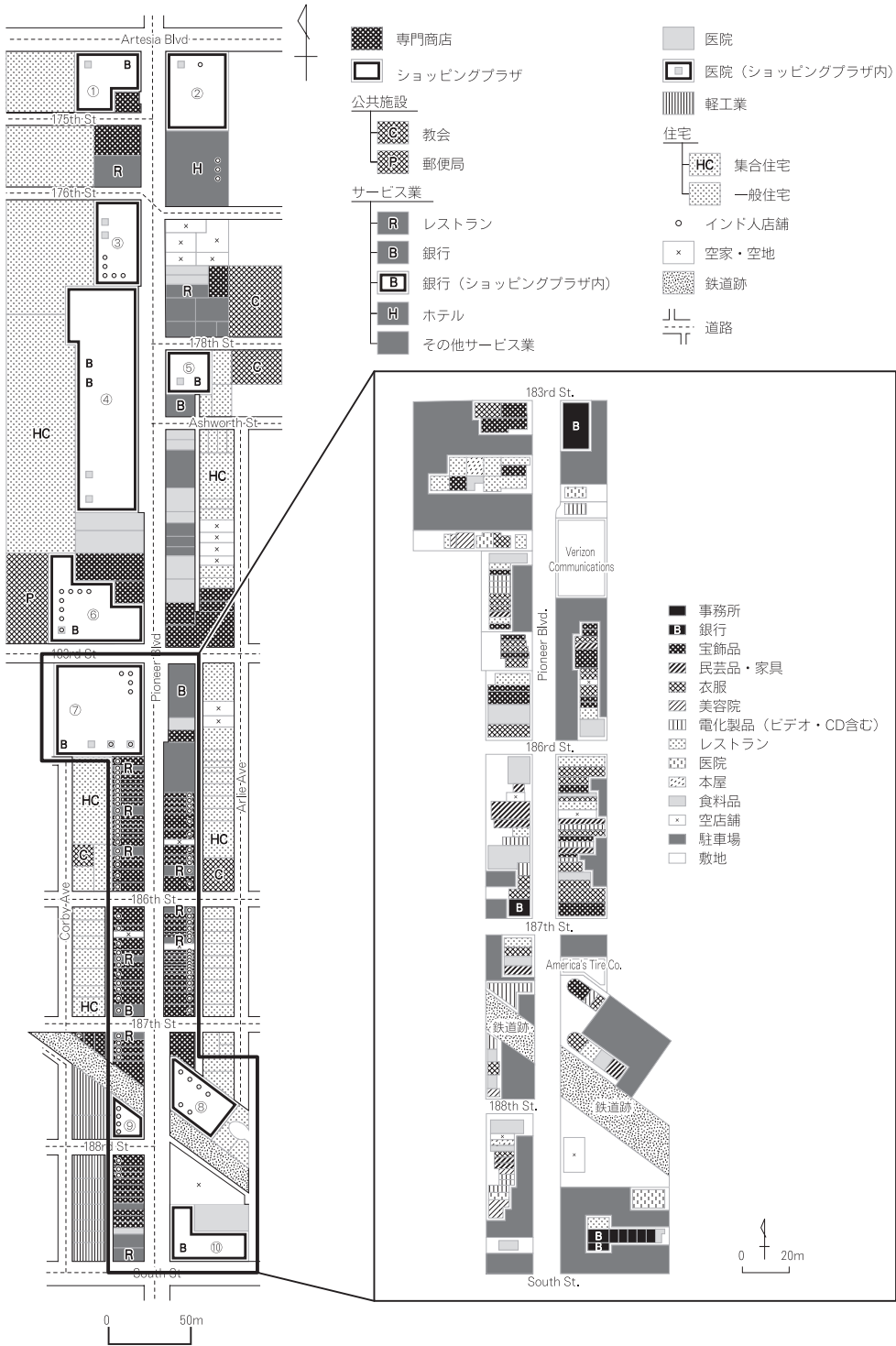


図6 2008年のパイオニア街とリトルインディアの業種構成  
(現地調査により作成)

表2 プラザ型商店街の主要施設と商店の特徴

プラザ名(通り名)	主要施設	棟割り商店街	特 徴
① Artesia Plaza (Pioneer Artesia)	Hanmi Bank	韓国系	食堂・電機製品
② Artesia Pioneer (Pioneer Artesia)	Valgreens	中国・韓国系	美容・医療
③ PG (Pioneer 178th)		中国・インド系	洋服・美容・食堂
④ Artesia Oasis Plaza (Pioneer 183 北西)	Ranch Market 99 華美銀行	中国系	スーパー・食堂・総合
⑤ World Plaza (Pioneer Ashworth)	中国系	医療・学習塾・銀行	
⑥ Artesia Towne Center (Pioneer 183 北西)	State Bank of India Jack in the Box	インド・韓国系	食堂・サリー
⑦ Pioneer Center (Pioneer 183 南西)	Habib American Bank・同発市場	インド・中国系	食堂・サリー・美容院
⑧ Little India Village (Pioneer Railway)		インド系	宝石・サリー・食堂
⑨ Sun Shine Plaza (Pioneer Railway)		インド系	食料品・サリー
⑩ Pioneer South (Pioneer South)	元 East West Bank (現眼科院)	中国・韓国系	不動産・医療

(現地調査により作成)

茶、パン屋、サンドイッチなどのレストランや食料品、化粧品店・美容院、携帯電話やビデオ店、家具、不動産店などである。さらに歯科医、小児医院、皮膚科医などの医院もある。ベトナム料理の Pho 2000 も入っている。なお、このスーパーマーケット 99 とパイオニアセンターのダイホー(同発超級市場)は台湾系の経営者であるという。その北の③ PG ショッピングプラザは全体としては韓国系であるが、インドの食材を売る食料品店、レストラン(Ambala Bhaha)とムンバイ(旧アンナプルナ食堂)とビデオ店が存在したので、韓国・インド系とした。なお、ここには唯一の日本人経営の熱帯魚店がある。

183番通りとパイオニアの北西角にある⑥アルテジアタウンセンターは、カリフォルニアインド銀行とハンバーガー店(Jack in the Box)が主要

施設である。インド系のリトルダッカやメフィールレストラン、ヤスミン、ジェイクリエーション、ダッカファッションなどのサリー店、食料品やビデオ店が存在する。しかし、韓国系の焼肉レストラン、美容院、歯医者、自動車学校も存在するので、インド・韓国系のプラザとした。その他のショッピングプラザはインド人商店街に関連するので、後述する。このパイオニア街のショッピングプラザでは、フィリピン系の店は目立たないが、アルテジア通りとノーウォーク街の角にある Seafood City を中心としたものは、フィリピン系であり、セリトスに2カ所存在するという<sup>4)</sup>。

### 3. 公共施設の外方移動と医療施設の残存

#### 1) 公共施設の近距離外方移動

パイオニア街にあった市役所(City Hall)は、

1959～1966年の間、一時的にサウス通りに移転していたが、1975年、郡立公園の西側の現在地に移転した。なお、その公園は、1928年から1951年までフランプトン氏経営の16エーカーの養鶏場に設置されたものである。また、1913年から1963年までパイオニア街にあった図書館も、その公園の西の現在地に移転した。一方、パイオニア中心街を何度か移転したアルテジア郵便局は、1969年に183番通りのアルテジアタウンセンターの西に移転した。同様に、商工会議所は消防署跡に移転したが、近年は開店休業中である。これらの公共機関は、駐車場の確保と住民の便を考慮して、近距離外方移動を行ったとみることができる。

次に教会の移転についてみよう。1876～1971年間に、パイオニア街と183番通りの角に存在し続けたメソジスト教会は、1972年に186番通りとエアライン街の角に移転し、アルテジア改革教会となった。跡地は銀行となった。アルテジアキリスト教会は、1959年に敷地を電話会社に販売したが、1962年に183番通りの東に再建された。そこにはパイオニア学校に設置されていた梵鐘が保存されている。

## 2) 医療施設の残存

パイオニア病院は前述のように1997年に廃止され、その跡はアルテジアオアシスプラザになった。そのプラザ内にも小児医療と皮膚治療院が存在する。しかし、その周辺には依然として小さな病院や治療院が残存している。ランチマーケット99の東には医療長屋があり、日系の医院と歯医者が入っている。アッシュワース（ポルトガル通り）の南には、歯科医院・歯列矯正医院がある。また、オアシスプラザの南にも医療長屋があり、三軒の医院が入っている。その向には歯列矯正院、鍼灸院がある。

アルテジアコミュニティ病院の跡地には現在、ヒンディクロスロードプラザが造成され、テナン

ト募集中である。その北には、医療ビルや医療長屋が存在する。ステファンカレー博士の医療ビルには、腎臓病、鍼灸院、医療機具販売会社が入っている。その北には歯科医院と足治療院が入っている。オアシスプラザとアルテジアタウンセンターの間には、老人ホーム（Foundation House）があるが、これも医療関係機関とみることができる。ともあれ、公共機関の移転跡、医療機関の脱出跡がショッピングプラザの形成やインド人街の形成に大きく貢献したといえよう。

## V リトルインディアの形成

### 1. 初期のインド人の商店

アルテジアに最初に店を出したのは、パイオニア街と183番通りの南西角にあるソナシャンディである。1979年にサリーの店を開設したソナシャンディは、1981年には金細工を扱う貴金属店を併設した。そして、1991年にはエステサロンの美容院を併設して複合施設ソナシャンディプラザとなった<sup>5)</sup>。ローズ貴金属店（Lords Jewelers）が開店したのが1982年のことである<sup>6)</sup>。ついでヒンディ貴金属店（Bhindi）が1983年に開店した。1985年の電話帳<sup>7)</sup>によるとこの2社に加え、ハイグロウ社も載っているが、それはパイオニア街ではなく、レイクウッド市のものであった。1995年になると、パイオニア街にはローズ、ヒンディに加え、アミ、プラス、キルン、クリシュナの6宝石店があった。2000年になるとハイグロウ、カリム、ニューソナ、シャリマール、シャン、シーラ、シェラザード、ヴィチア等が加わり貴金属店は13店舗に増えた。

一方、インドレストランをみると、最も古いものは、1984年にオープンしたアショーカ<sup>8)</sup>であるが、それ以前に存在したインドレストランは潰れたという。二番目のレストランはアンバラであるが、電話帳に記載がない。ただ、1995年の電話帳

表3 アルテジア中心街\*におけるインド系レストランの立地

レストラン名	番地	1995	2000	2005
Ashoka the Great	18614	○	○	○
Jay Bharat Rest.	18701	○	○	○
Little India Grill	18383	○	○	○
Standard Sweet & S.	18600	○	○	○
Ambala Sweets	18433	○		○
Bombay Sweet & S	18526		○	○
Shan Restaurant	18621		○	○
Udupi Palace	18635		○	○
Rasraj	18511			○

\* ほほパイオニア街の183番通りから187番通りまでを指す。

(電話帳により作成)

にはいくつものレストランが載っている。その様相を示したのが表3である。表3は183番通りから187番通りまでのものを示したものであるが、パイオニアセンターのリトルインディアグリル、186番通りの角のスタンダードスイーツ、187番通りの角のベジタリアンレストラン、ジェイバラートが立地していたことになる。2000年になるとアンバラスーツ、シャンレストラン、ウドピパラスなど今日の有力レストランが立地し、リトルインディアの様相をみせるようになった。

次にサリーの店を見ると、電話帳には衣料(Cloth)とファッションの所に出ている、前者より形成時期を決定するのは難しいと思われる。一般にサリーの店はシルクアンドサリー、ファッションハウス、ファッションギャラリー、ブティック、デザインスタジオなどの名前が使われている。例えばタウンセンターのヤスミンブティックは1990年に立地したが、隣を買収してヤスミン貴金属店を併設し、2000年にはパイオニア街にシャンレストランを開業したという<sup>9)</sup>。タウンセンターで隣接するダッカファッションもリトルダッカというレストランを兼営している。なお、ここにはカリフォルニアインド銀行があり、その二階部分には

インド系の法律事務所とサリー店もある。つまり、前述のソナシャンディ同様、サリーを拠点に事業を拡大したものとみることができる。

以上のように、インド人の店舗を代表する、貴金属、レストラン、サリーの店を見る限り、インド人街は、1990年頃からの動きが活発となり、1995年にはリトルインディアの様相を呈してきたものと思惟され、2000年には一般化したといえよう。

## 2. インド人街の構成－2008年－

リトルインディアはパイオニア街と183番通りとの交差点から、187番通りの交差点までに展開する。今では188番通りまでということが出来る。パイオニア街と183番通りの交差点の南西はパイオニアセンターに、南東はオレンジ郡銀行(現ウエルスファーゴ銀行)となっている。パイオニアセンターには角地にソナシャンディの複合店舗とハビブアメリカ銀行があるが、台湾系の頂好(旧同発)スーパー店や食堂等が入っているのも、華印プラザということが出来る。ここにはリトルインディアグリルに加え、二つのサリー店が入っている。しかし、中国系では海鮮閣など3つのレス

トラン、パン屋、熱帯魚店、書店、さらにはジュースショップ、眼鏡、薬屋、美容院があり、2階には歯科医や鍼灸院が入っているので、中国色が濃いいといえる。なお、梨花というベトナム料理は、最近アジアマサラというインド系料理店に変わった。ウエルスファーゴ銀行の南には1つの医院、楽器店があり、電話会社（ヴェライゾンに改名）となる。パイオニアセンターの南の細い旧185番通りの南からインド人街が展開する（図6の拡大図）。すなわち、その角にはインド系食料品店（Ambala Cash and Carry）がある。その南は、駐車場が設置されたミニプラザになっている。ここにはレストラン2、宝石店1、ビデオ・電機店2、サリー店3、民芸品1が入っている。食堂のアンバラスイーツとアンバラエクスプレスはアンバラ食料品店の系列店である<sup>10</sup>。

細い185番通りの南の長屋には、ヴィチャとシーラという貴金属店とサリー店およびラブリンサリー店が入っている。ここでは貴金属店とサリー店がセットで同じ経営者によって営まれている特色を有する。その南は186番通りに接する、新しく建てた2階建ての店で、フロンティアというサリー店とファームフレッシュという食料品店が入っている。その建物1階の北側にはレストランラジと宝石店2が入っている。2階にはレストランと貴金属店が入っている。一般に商店の立地には2階は不利であるが、土曜の夜にはこのレストランも満杯になる。パイオニア街の東側、電話会社から186番通りまではヒンディ貴金属店に代表されるプラザで、比較的早く開発されたもので、貴金属店やインド香辛料店（食料品 Spice of India=1984年開設）、ボンベイ甘味店、サリー店が入っている。

186番通りから187番通りまでが初期からパイオニア街の中核であったが、それはリトルインディアにも妥当する。パイオニア食料品店の南

はサリーの店であったが、最近ポストマ家具店となっている。この家具店は前述のようにオランダ系の経営であるが、規模拡大した現在では展示物はインド系顧客を相手にするものになっている。その南はインド系の民芸店、シャンレストラン、電子・ディスク店と続く。その南は、かつてアルテジアペーカーリーであったが、ケルリトルインディアという食料品店に変わった。その南はビデオ店、ベジタリアンレストランとなる。そして二つのサリー店があり、中国系のキャシイ銀行になる。一方、東側は186番通りに沿ってスタンダードスイーツ、ギフト店、レストランと3軒並ぶ。道を挟んで美容院もある。パイオニア街に戻ると2軒のサリー店を置いてローズ貴金属店があり、食料品と衣料店を挟んでレストランアショカがある。そして民芸品、ビデオ店、サリー店、貴金属店、食材店等が並んで宝石店ハイグロウとなる。この貴金属店は、22金のネックレス、イヤリング、指輪等を中心に販売している。一般に貴金属店は店構えが大きいといえる。この店の奥側にサリー店がある。

以上のように、この中核地帯には貴金属店、レストラン、婦人服のサリー店が軒を並べリトルインディアの中核を構成しているといえよう。もちろん、これらのサリー、レストラン、貴金属店という御三家に加え、台頭してきているのがビデオ、電子器機を販売する電気店である。さらに、インドの故郷の食材を提供する香辛料や豆類を販売する食料品店が重要な構成要素になっている。

### 3. インド人街の拡大とその背景

リトルインディアは拡大し続けている。187番通りからサウス通りまでみると、かつてのフランクプトンの店のあった場所には、ベジタリアンレストラン=ジェイバラート、サリー、ラサ食料品店、民芸品店の5つが入っている。その南は欧米系の

デイルケنز家電店がある。線路跡の南はサンシャインプラザになっており、そこにはニリギリス雑貨店、サリー、シャン食料品店、美容院、ビデオ店が入っている。食料品店ではヒンズー教徒でも食べてよい聖なる肉も販売している。188番通りの南では洋酒店、理髪、入れ墨店が東西に並んでいるが、その南にはサリー、貴金属店、民芸品、美容院が入っている。その南には韓国系の電子機器店、歯医者、鍼灸院が入り、サウス通りの角に欧米系のハンバーガー店が入っている。

一方、東側を見ると187番通りの南には、タイヤ会社が入っているが、その南には線路の方向に合わせ、二棟のリトルインディアビレッジが作られた。この新しいショッピングプラザには宝石店、サリー店、レストラン、雑貨店が入っているが二階の奥は空き部屋となっており、テナント募集中でもある。線路の南側には、かつての材木会社の名残を示す小屋が残っているが、空き地となっている。サウス通りと面する角地には East West (華美) 銀行が入っていたが、それは斜め向かいの中国系ショッピングプラザにある同銀行に吸収され、その跡は眼科医院になった。この一角には欧米系の不動産会社、電話、ドーナツ、花屋などの入った長屋が存在するが、その裏にも韓国系の眼科医や医院がある。

次いで、183番通りから北のアルテジア通りまでのインド系の店舗をみよう。アルテジアタウンセンターについては記述した。その向かいのアルテジアコミュニティ病院のあったところは、新しいショッピングプラザヒンディクロスロードが建設中であった。1008年9月現在、アイスクリーム店が入っているだけで、テナント募集中である。これら2つのインド系集合店舗を除くとしばらくショッピングプラザや医療・法曹関連施設がならび、インド系店舗は見られない。アッシュワース (ポルトガル) 通りとの北東角にジーバ美

容院があり、1階にインドレストランと携帯電話店が入っているが、2つのロットはサリーの店であったが空いたままである。また、ショッピングプラザ PG の中にはアンバラバーハとアンナプルナエクスプレスというインドレストランと食料品店、ビデオ店が入っていた。アンバラバーハは中心街にあるアンバラ食料品店の系列であるが、アンナプルナは2006年にレストランムンバイに変わった。さらに、アルテジア通りからパイオニア街に入ったところにマモナホテルがあった。インド人が多くの都市で安宿モーターを運営しているのは知られているが、このホテルはそれより立派であったので、2007年にチェーンホテルのデイズインに変わった。しかし、経営者はインド人のままで、正面1階にはインド系の宝石店とギフトショップが入っている。さらに食料品や貸金業者も入っている。この北の、アルテジア通りのアルテジアパイオニアプラザにインド系の食料品店が入っている。

以上のようにインド系商店は、186番通りから187番通りを中核に185番通りまでで稠密に分布し、183番通りから187番通りまでのリトルインディアを形成している。しかし、それは183番通りの北のアルテジアタウンセンター、ヒンディクロスロードまで浸透し、北はアルテジア通りまで、南はサウス通りまで拡大してきた(図6参照)。インド人の商店の名前をみるとムンバイ、ボンベイ、ダッカ、ニリギリス、シャンなどの地方名が記されているので、リトルインディア内でも出身地による住み分けが行われているのかも知れないが、それを確認するまでには至らなかった。

ところで、上記のアルテジア通りからサウス通りまでのパイオニア街以外でもインド人関係の文化景観がみられる。1つはアルテジア市の北、ノーウォーク市のパイオニア街にあるヒンドゥー寺院、シレースワニナラヤン (Shree



Swaminarayan) 寺院, サンタンダルマ (Santan Dharma) 寺院である。また, インド人学校もある。周知のようにインド人のレストランは中華料理店ほどではないにしてもアメリカの大都市では見いだせるようになってきた。しかし, アルテジアのパイオニア街は貴金属, レストラン, サリー店, 美容院に加え, 食料品等も購入できるので多くのインド人を顧客としている。その規模も大きいので, 西海岸最大のリトルインディアと呼ばれるようになった。

このようにインド人街の発展がみられたのは, 1990年の移民法が移民の年間総枠を67万5千人に増加させるとともに, 専門的知識や技術を有する移民の入国を奨励することになったことに起因する。これはコンピューター等の能力に優れたインド人や中国人の移民を増大させることになった。オレンジ郡のアナハイム周辺には, コンピューター関連の企業や工場が多い (Scott, 1988) のでインド系の IT 技術者が多く居住するようになった。アルテジアのリトルインディアはロサンゼルス郡の南東端にあり, オレンジ郡に居住するインド人にとってアクセスに便利である。従来の貧困から脱出するための移民ではなく, 知的財産を背景に豊かなアメリカ生活を享受する新しい IT 移民に支えられて, リトルインディアは発展していると考えられる。さらにリトルインディアの認知の向上によってインド系以外のアメリカ人を引きつけるようになりつつある。

## VI むすび

ロサンゼルス郡の東南端にあるアルテジアはその名の通り, 自噴井戸による灌漑農業が可能となり, ブドウ, ビート, ピーマン, イチゴなどが栽培され, 近郊農業の様相を呈した。1923年のサンボーンマップによると, メインストリート (現パイオニア街) のパシフィック電機鉄道 (その北の

3番 (187) 番通りからオレンジ (183番) 通りまでが, 中心商業地区をなしていたことがわかる。学校, 教会, 病院, 郵便局などの公的機関に加え, ホテル, 銀行も立地して中心性を高めていた。また, パン屋, レストラン, 洋服屋等に加え, 自動車販売・修理と馬具屋が併存していた。

アルテジアとそれを取り巻くデアリーバレーには, 1930年頃から酪農家が集中するようになり, 第二次世界大戦を挟んでオランダ系, ポルトガル系酪農家が集中するようになった。1952年の大洪水の後にも, 酪農保護区に指定されたこともあって多くの酪農家が集中していた。しかし, 1956年の市制施行に伴って, 土地の細分化が認可され, 住宅地化を中心とした都市化が始まった。1962年のパイオニア通りの中心街をみると, アルテジアコミュニティ病院, パイオニア病院が立地し医療機関が集中しつつあった。しかし, 乳質検査所, 飼料会社, 酪農機具販売会社や畜産会社が残存していた。しかしながら, 183番通りから187番通りまでのパイオニア街には, 教会に加え, 市役所, 郵便局, 図書館の公的機関が立地し, 中心性を強めていた。また, パン屋, 食料品店に加え, 洋服屋, レストランが立地し賑わっていた。

1970年代に入ると酪農場は見られなくなり, ヒスパニックをはじめ, フィリピン系, 中国系, 韓国系の人びとが流入し, 多文化・多民族都市に変貌したのである。現在の, つまり2008年のパイオニア街をみると, 病院は高度医療化で郊外に移転, あるいは巨大病院に統合されてなくなった。しかし, 183番通りの北には歯科, 鍼灸院などの医療施設の残存も認められる。1980年前後から病院の跡地の区画整理を含め, パイオニア街はショッピングプラザ化したことに特徴があり, 中心商店街はリトルインディアと化した。ショッピングセンターより小規模のショッピングプラザは銀行やスーパーなどの主要施設と長屋型商店街か

らなる。しかも、それらの商店街は民族構成を反映して様々な商店からなるが、中国系、韓国系、インド系などに分類される。

183番通りから187番通りまでの中心商店街からは、市役所、郵便局、図書館に加え、教会などの公的機関が近距離移動した。その跡に1980年代からインド人経営のサリー店、貴金属店、レストランが進出しはじめ、1995年頃にはリトルインディアの様相を示した。週日は近隣の人びとや観光客が訪れる程度だが、終末になると多くのインド人が訪れ、賑やかになる。インド人は24金のネックレスや指輪を値踏みし、サリー店で流行の洋服を買い、故郷のインド料理を家族で楽しむ。そして帰りには食料品店で、多様な種類の米、豆類、野菜、果物のなかから自分にあった食材を一週間分買って帰るのである。1990年に移民法の改正により専門的知識や技術を有する移民が歓迎されるようになり、インド系、中国系のIT技術者がオレンジ郡のアナハイム周辺に住み、富裕層を形成するようになった。オレンジ郡との境界地帯にあるアルテジアにおけるリトルインディアの発展はこれらの人びとに支えられているといえよう。

## 謝辞

本稿の現地調査には科学研究費補助金基盤研究(B)「ロサンゼルス大都市圏における移民の適応戦略・エスノスケープと都市構造の動態」(代表者: 矢ヶ崎典隆, 課題番号14380024)の一部を利用した。カリフォルニア大学ノースリッジ校の地図室からはサンボーンマップや空中写真の提供を受けた。また、ロサンゼルス中央図書館では人口センサスを閲覧した。作図をお願いした筑波大学大学院の渡邊敬逸君とともに関係各位にお礼を申し上げたい。

## 注

- 1) サンボーンマップとは保険会社と契約したサンボーンマップ社 Sanborn Map Company が作製した地図で、建物の保険契約の必要上、建物の材質(タイル、レンガ・木材)、階層(2階)、機能(学校・工場・商店)等がカラー刷りで記載されている地図である。
- 2) ポストマ家具店のオランダ人経営者からの聞き取りによる(2008年9月8日)。
- 3) 一般に Jewelers, Jewelry は宝石商、宝石店と訳されるが、パイオニア街の宝石店は日本と異なり、豪華な金細工のネックレス、プレスレット、指輪等が中心に並べられているので、貴金属商とした。
- 4) 台湾人の剣道師範八段黄永春氏からの聞き取りによる(2009年2月22日)。
- 5) Sona Chandi の経営者からの聞き取りによる(2008年9月7日)。
- 6) Lords Jewelers の経営者からの聞き取りによる(2008年9月7日)。なお、同社はアフリカのケニアで宝石商をしていて、ここアルテジアに移転してきたものであるという。しかも支店をシカゴ、ニューヨーク、ロンドンに広げている。
- 7) 電話帳は地区別にいくつも出されている。アルテジアはロングビーチ版と北部版に含まれるものがある。近年ではアルテジア・セリトス版が出ているが、よく掲載されているのは宝石商、レストラン、サリー店、美容院などの順で、欠落もある。
- 8) 1984年に進出したアショーカ(Ashoka the Great)は、アルテジアに加え、サンディエゴ、アナハイム、ラグナにもレストランを所有するという(2008年9月7日)。
- 9) Shan Boutique の経営者からの聞き取りによる(2008年9月19日)。最近近くのパイオニア街に引っ越した。
- 10) Ambala Cash & Carry の経営者からの聞き取りによる(2008年9月19日)。

## 文献

- 斎藤 功 2006 カリフォルニアにおける大規模酪農家の立地移動。地理学評論, 79-2, 53-81.
- 町村敬志 1999 『越境者たちのロサンゼルス』平凡社.
- Allen, J. P. and Turner, E. (1988) : *We the People: An Atlas of America's Ethnic Diversity*. Macmillan Publishing Company.
- Allen, J. P. and Turner, E. (1997) : *The Ethnic Quilt : Population Diversity in Southern California..* California State University, Northridge.

- Allen, J. P. and Turner, E. (2002) : *Changing Faces, Changing Places; Mapping Southern California*. California State University, Northridge.
- Bloomfield, V. L. and Broomfield V. E. (2000) : *Artesia 1875-1975*. Arcadia.
- Fielding, G. (1962) : Dairying in Cities Designed to Keep Out. *The Professional Geographer*, **54**, 12-17.
- Fletcher, L. and McCorkle, C. Jr. (1962) : Growth and Adjustment of the Los Angeles Milkshed: A Study in the Economics of Location. *Division of Agricultural Sciences, University of California, California Agricultural Experiment Station, Bulletin*, 787.
- Li, W. (1997) : *Spatial Transformation of an Urban Ethnic Community from Chinatown to Chinese "Ethnoburb" in Los Angeles*. Ph. D. Dissertation, University of Southern California.
- Li, W. (1998) : Anatomy of New Ethnic Settlement: The Chinese Ethnoburb in Los Angeles. *Urban Studies*, **35**, 479-501.
- Li, W., Dymski, G., Zhou, Y., Chee, M. and Aldana, C. (2002) : Chinese American Banking and Community Development in Los Angeles County. *Annals of the Association of American Geographers*, **92**, 777-796.
- Lin, J. and Robinson, P. (2005) : Spatial Disparities in the Expansion of the Chinese Ethnoburb in Los Angeles. *GeoJournal*, **64**, 51-61.
- Scott, A. J. (1988) : *Metropolis*. University of California Press.
- Splansky, J. (1996) : *A Geography of Dairying in the Los Angeles Basin: Past and Present*. Unpublished draft.

**Change of Cultural Landscape and Little India on Pioneer Street in Artesia and Cerritos,  
an Ethnoburb of Los Angeles**

SAITO, Isao

Faculty of Tourism and Environmental Studies, Nagano University

Artesia and Cerritos are located in the southeastern edge of Los Angeles County, California. Suburban gardening in these areas changed to the dairy reserve from 1930 to 1960. Dutch and Portuguese dairy farmers were pushed out due to the urban development of Los Angeles and became concentrated in Artesia and Dairy Valley (now Cerritos). Artesia and Cerritos were incorporated as independent cities just before 1960, and the dairy reserve was divided into small lots for the residential and commercial use. Many people, especially Filipinos, Koreans and Chinese became concentrated there in the 1960s and 1970s. These ethnic groups formed one of the Ethnoburbs of Los Angeles.

According to the Sanborn Map surveyed in 1923, public buildings such as school, hospital, churches, post office and town hall on Pioneer Street were focal points of people of the surrounding market gardening areas. Based on air photos and telephone directory of 1962, outstanding cultural landscape was hospitals on Pioneer Street, most of the public facilities and private shops were remained.

Around 1980 many shopping plazas were constructed on the site formerly occupied by hospitals and at the crossroad. Each shopping plaza has ethnic features of banks, restaurants, clinic and grocery stores. One of the greatest changes of cultural landscape on Pioneer Street was the shift from central shopping district to "Little India." The first Indian shop opened in 1979, and sari shops, jewelry stores and restaurants increased. Around 1995 Indian shops accounted for the majority of the shopping district, suggesting the formation of "Little India."

**Key words** : market gardening area, dairy reserve, ethnoburb, Pioneer Street, Little India